



RI過剰投与

著者：諸澄 邦彦



本書の著者は、本誌 (*Isotope News*)において長く連載された名コラム「医療史跡」の著者である。「医療史跡」は2025年8月号（通算800号）「核医学の扉を拓いた仁科芳雄」をもって最終回を迎えた。そんな人気シリーズの著者が長編フィクション『RI過剰投与』を上梓した。舞台は病院の放射線部における「RI検査」、つまり核医学検査室である。舞台設定はやや過去のものかもしれないが、そこに描かれる人間関係や現場の状況は、今でも通じるものであろう。「RI過剰投与」というタイトルは、ある出来事を思い出させる。2014（平成26）年に報告された市立病院のRI検査問題であり、報告書は現在も公開されている。

本書はあくまでフィクションだが、核医学検査の撮像方法や投与量の他、関係者の関わり方や会話が詳しく記され、現場の臨場感に満ちている。医者と技師、技師同士のやりとりも実際にリアルで、医療現場の空気がそのまま再現されているようだ。その中で、「RI過剰投与」がどのように発生したのか。登場人物たちの心の動きと共に、その状況が克明に描きだされ、読み手が問題点を検討するに十分詳しい内容となっている。

問題は何だったのか。原因となった要素を突き詰めたくなるが、重要なのは、その複数要素が重ならざるを得なかった状況である。どう分析するかは読者次第であり、読者が置かれた環境にもよるだろう。しかし、本書にあるのは普遍的な問題であり、もう一度、本書を通して普段の環境を見直すことに役立つ1冊であろう。

本書の詳細を以下に紹介する。第1章は「冠動脈CT」。酸素と栄養を届ける動脈血が心筋に行き届いているか知るための検査法について、別の検査法との比較、治療との関連等、医師・技師の議論から始まる。様々な利点・欠点が検討されるが、それぞれの立場の複雑な思惑も垣間見られる。第2章「腎シンチグラフィー」では、更に核医学検査における「少しでも良質な画像」を得るために、その場その場の状況に合わせた可能な限りの手

段が勘案される。特に小児では核医学検査の最大の課題である体動の問題がある。体動によって画像が悪くなると、結果として無駄な検査になりかねない。本書でも、体動の影響をできるだけ少なくする方法がとられる。そして、第3章「医療安全委員会」では、結果的にその方法が問題視されるが、管理監督者の理解が及ばない。管理監督者は現場を把握できる知識・経験があり、それらに裏付けられた発言力を持つべきだろう。残念ながら、本書に登場する管理監督者らは、そうではなかったようだ。それ故か、第4章「投与量検討会」では、専門家に問題の分析が任せされることになる。実施状況やその背景にある体制について指摘されるも、問題が「過剰投与」という点に集約され、全体の状況を俯瞰し、理解する視点がないまま事態は進むことになる。第5章「新聞報道」では、記者が鋭い勘を働かせ、事実を掘んでいく。しかし、それは医療現場がおかれた体制や環境にまで思いが及ばず、その限られた情報は、事実の周知という単純なものではなく、混乱や糾弾といった行動を生じさせる。続く第6章「記者会見」、第7章「保護者説明会」では、保護者らの気持ち、不安がありありと伝わってくる。なぜ、このような状況に至ったか、その理解を保留にしたままでは第三者からの質疑に対応できるわけがなく、重苦しい雰囲気が描かれている。そして最終章。そもそも良質な検査をしたいという思いのはずが、医師法違反という1点に結末を見ることになってしまう。

医療現場は、人の役に立ちたいという思いが人一倍強い人たちの集まりともいえる。その思いを発揮させるには環境の支えが必要である。本書は、そうした視点を根底に持つフィクションで、舞台は、非密封放射性同位元素を利用した医療現場であり、ひと言でいえば、体制にあるいくつかのグレーゾーンの重なりに、ひとりの医療従事者が陥っていく過程ともいえる。筆者は同じ医療従事者として、本書の内容は、決して他人ごととは思えない。医療現場と、医療の歴史に造詣の深い著者が、あえて、「RI過剰投与」というタイトルで本テーマを取りあげ、フィクションにした理由は、問題の背景に潜む構造的課題を問うために必要な方法だったのではないか。そして、医療現場にとどまらない普遍的課題¹⁾であると思う。

参考記事

- 1) 2024年1月2日に東京国際空港で発生した航空機事故に関する緊急声明

（高橋美和子 量子科学技術研究開発機構 量子医科学研究所 分子イメージング診断治療研究部 核医学診断治療研究グループ）

（ISBN：978-4-286-26531-5、四六判、264頁、定価1,430円（本体1,300円+税10%）、文芸社、<https://www.bungeisha.co.jp/>、2025年）